㊙モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 5 -12

学用品

目次

要　約 …… 2

はじめに …… 4

1．子どもの持つ学用品の実態 …… 5

- こんなに持っている …… 5
- そのうえストックも …… 8

2．おこづかいとの関連で …… 9

- おこづかいの額 …… 9
- その使いみち …… 11

3．子どもの所有感覚 …… 14

- 友だちと交換してよいもの …… 14
- 学用品の記名率 …… 18
- 大切なものは何か …… 19

4．いま子どもの使っているもの …… 21

- ふで箱のなかみ …… 21
- ふで箱の種類 …… 25
- 鉛筆・下じき・消しゴム …… 28
- ランドセルと机 …… 30

5．学用品と子どもの愛着 …… 32

- 学用品のルーツ …… 32
- いつから使っているか …… 35
- 学用品への愛着の度合い …… 36
- もったいなさの感覚 …… 41

まとめに代えて …… 43

シリーズ／講座・子ども調査入門㉔
子ども理解を深める10冊の本 …… 深谷昌志 …… 44

資料1　調査票見本 …… 48

資料2　学年・性別集計表 …… 58

調査レポート／学用品

要　約

東京学芸大学助教授　深谷和子
東京都江戸川区立小松川第二小学校教諭　矢部　崇
横浜市立港北小学校教諭　戸塚　智

①たくさんの学用品

豊かな社会の中に生まれた現代の子どもたちは、モノの汎濫する中に暮らしているが、学用品も例外ではない。たとえば1人平均、ふで箱を4個、定規4本、下じき4枚、さいふ3個、シャープペンシルを4本も持っている。(図1)

②そのうえストックも

さらに子どもたちは、新しい学用品のストックも持っている。新しいエンピツ18本、新しい消しゴム6個、新しいノート5冊など。これでは落としものの持ち主が出てこないのは当然だろう。(図2)

③おこづかいで買う学用品

月のこづかい額は4年生710円、5年生948円、6年生で1,182円だが、その使いみちには、かなり学用品が含まれている。学用品の購入は、現代っ子の楽しみのひとつになっているようだ。(図4、図5、図6)

調査概要

1.調査主題　学用品

2.調査視点　ものの氾濫する豊かな現代社会の中で、子どもたちにとって学用品は身近な所有物である。子どもをとりまく環境のひとつとしての学用品と子どもとのかかわりをさぐる。

3.調査項目　自分専用の学用品の数／鉛筆、消しゴム、ノートのストック量／ふで箱の中味／学用品の記名実態／学用品の使い方／友だちと交換できるもの／など

④自分のものという感覚

こづかいで買ったものは、ほぼ自分に所有権がある(友だちと交換しても親にしかられない)と考えているようだが、それらへの記名率は非常に低い。(図7、図8、図9、図10)

⑤ふで箱のなかみの多様さ

ふで箱をはじめとして、なかみに至るまで、実に多彩で、ファッション化しており、オモチャ箱化しているとも言えそうだ。学用品に遊びの要素を子どもたちが要求しているかのように思われる。(表5～表8、図12～図18)

⑥しょっちゅう買い換える

ランドセル、机のような高額商品は別として、こづかいで買えるような学用品を、子どもはしょっちゅう買い換えている。たとえば「ふで箱」について言えば、毎年4人に3人は、買い換えている計算になる。(図28、表11)

⑦捨てることは苦手

子どもたちは、使いかけのものでも捨ててしまうことは苦手らしい。それなりのもったいなさの感覚と、愛着と、整理能力のなさとが同居しているように思われる。(図29～図39、表12)

4.調査時期　1985年（昭和60）6～7月

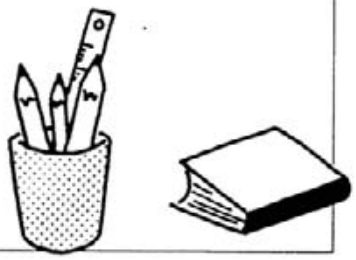
5.調査対象　東京、神奈川の小学4・5・6年生

6.調査方法　学校通しによる質問紙調査

7．サンプル数　（人）

学年／性	男　子	女　子	計
4　年	214	183	397
5　年	267	290	557
6　年	223	192	415
計	704	665	1,369

はじめに



子どもたちが学校に持ってくる学用品を注意してみると、実にさまざまな種類とデザインのものがあることに気づく。家庭では、自分の子どもの持ちものしか見ることのできない母親も、学校の落としもの箱やデパートの文房具売場をのぞいてみると、その豊富な品々と種類の多さにびっくりするばかりであろう。色や形、キャラクターなどがどれも異なり、子どもがほしがるように、うまく工夫されている。豊かな社会と言われる現代は、いたるところにものが氾濫している。その中で育ってゆかなくてはならない子どもたちだが、果たして、現代のこの環境は、子どもたちの成長にとって望ましい環境なのだろうか。

小学校に通う子どもたちは、自分の手でお金を稼ぐことをほとんど経験していない。あるとしても、せいぜい家での手伝いをしておだちんをもらうくらいのものかもしれない。

だが、子どもの生活をのぞいてみると、いかに多くの品物が子どものために用意されていることか。子ども部屋・ピアノ・テレビ・自転車・ベッド・ステレオ・ファミコンなどは、その高価な品物の一例にすぎないのだが、これは、子どもたちが、一人で収入を得ることの苦労や喜び、その尊さを味わうことなしに、ただ消費することを覚えて成長することを意味している。そうした中で、子どもたちにとっての学用品は特に彼らに身近な所有物であり、学校・家庭・塾などを通してたえず触れ合っている対象である。

しかしこのような学用品にも、最近大きな変化が見え始めてきた。一昔前までは「勉強に使う道具は大切にせよ」、「本をまたぎ越してはいけない」など厳しくしつけられた記憶のあるわれわれに、この頃の学用品は、半ば遊び半分のオモチャであるかのように目にうつる。

本調査は、現代の子どもをとりまくこのような環境を、学用品の立場から迫ろうとしたものである。このようなことを考慮しつつ、さっそく調査結果の報告に入ることにしよう。

1．子どもの持つ学用品の実態

こんなに持っている

まず、子どもがいったいどんな学用品をどのくらい持っているのかを見てみよう。まず表1は「自分のもの」としてどのくらい学用品を持っているかを質問したものである。これら14品目には、必ず必要なものもあれば、なければないですむものも含まれている。これによると、さすがに毎日学校で使用する、ふで箱、定規、下じきなどの数量が多いことがわかる。図1は全体の平均個数だが、ふで箱で4.4個、定規が3.7本、下じきが4.1枚となっている。さらに、机、ホチキス、そろばん、ナイフ、電卓など所有率の低いものを除いて、女子のほうが男子よりたくさん持っていることもわかる。女子の文房具好きはどこから来るのだろう。これらはみな自分のこづかいでまかなえる金額のものだから、さしずめ、女子は買いもの好きとでも言えるのかもしれない。

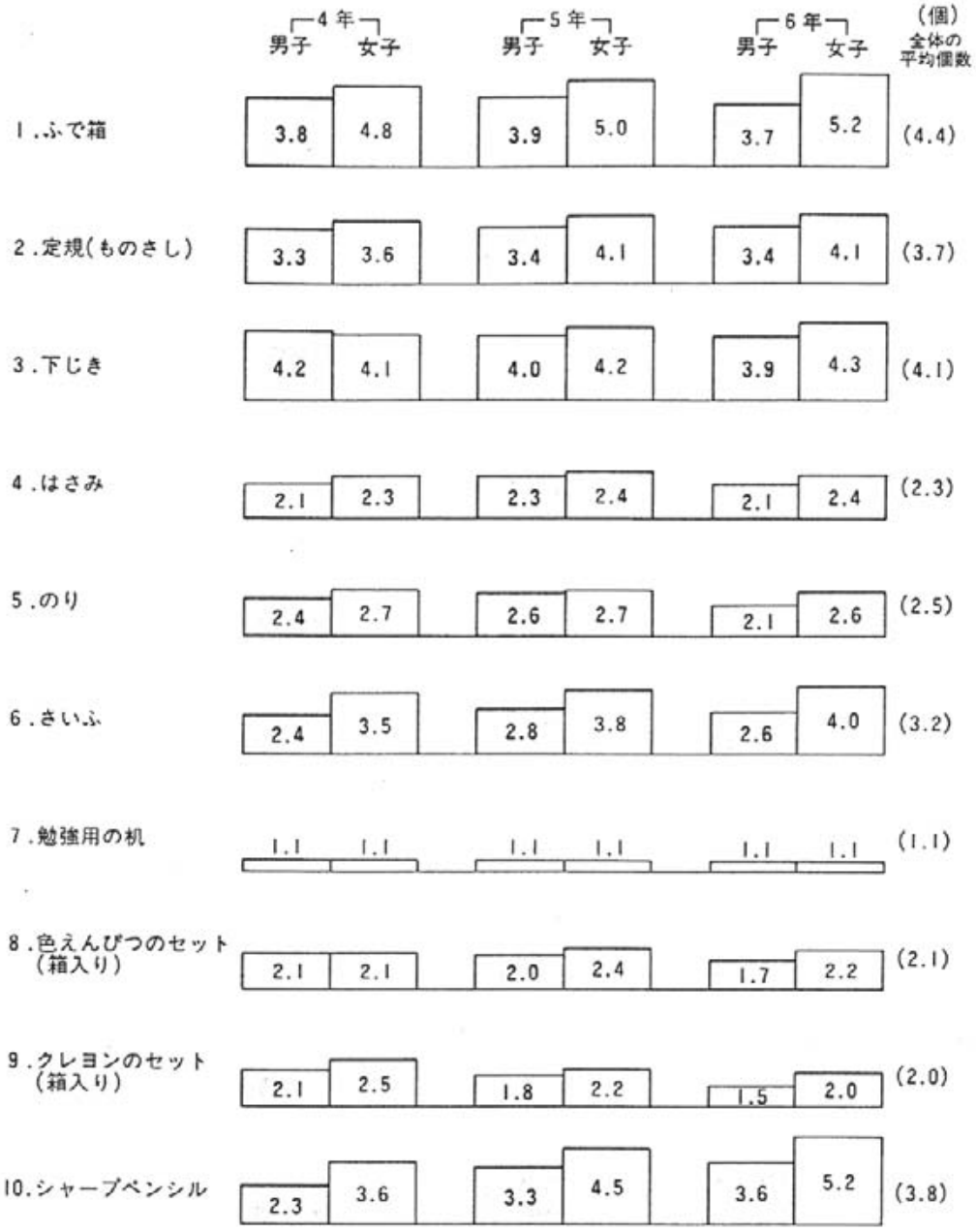
しかしとにかく全体としては、子どもたちがやたらに余分なものを持っているという感じは否めない。われわれ（日本の国全体が貧しい時代に育った）おとなとしては、どれもが「1個」あればよいようにも思ってしまう。しかし1個に近いのは「机」（90%）と「そろばん」（65%）だけで、あとはナイフと電卓を除いたほとんどの品物が、2個以上となっている。さらに6個以上も持っている完全な「持ち過ぎ」の者の割合を見てみると、ふで箱36%、下じき34%、シャープペンシル36%という数字が見られる。いったいそんなに数多くのものを、子どもたちはどう使いこなしているのだろうか。おそらく机のひき出しの中に、散乱しているに違いないという気もする。

表1　子どもの持つ学用品の個数

(%)

個数 / 子どもの持つ学用品	0 (もっていない)	1個	2個	3個	4個	5個	6個以上
1.ふで箱	0.1	5.1	9.8	15.1	16.8	17.1	36.0
2.定規(ものさし)	0.2	7.7	18.6	23.0	19.4	11.6	19.5
3.下じき	0.3	6.2	14.3	18.8	15.3	11.5	33.6
4.はさみ	1.1	27.0	37.1	21.6	7.6	2.6	3.0
5.のり	1.6	23.8	31.2	23.8	9.9	3.6	6.1
6.さいふ	2.1	12.7	24.8	24.5	13.4	9.4	13.1
7.勉強用の机	3.0	89.7	5.6	1.0	0.5	0	0.2
8.色えんぴつのセット(箱入り)	3.3	31.5	35.9	18.1	7.1	2.3	1.8
9.クレヨンのセット(箱入り)	7.5	34.9	28.8	17.8	6.7	1.3	3.0
10.シャープペンシル	7.5	12.5	12.5	13.3	9.8	8.1	36.3
11.ホチキス	9.8	45.7	30.1	10.3	2.4	0.7	1.0
12.そろばん	12.5	65.2	16.7	3.6	1.3	0.4	0.3
13.ポンナイフ	36.5	38.4	16.2	5.4	1.9	0.7	0.9
14.電卓	64.0	26.1	5.2	2.5	1.0	0.8	0.4

図1　学用品の平均個数―性・学年別



(その他の平均個数　ホチキス 1.6個、そろばん 1.2個、ポンナイフ 1.0個、電卓 0.6個)

そのうえストックも

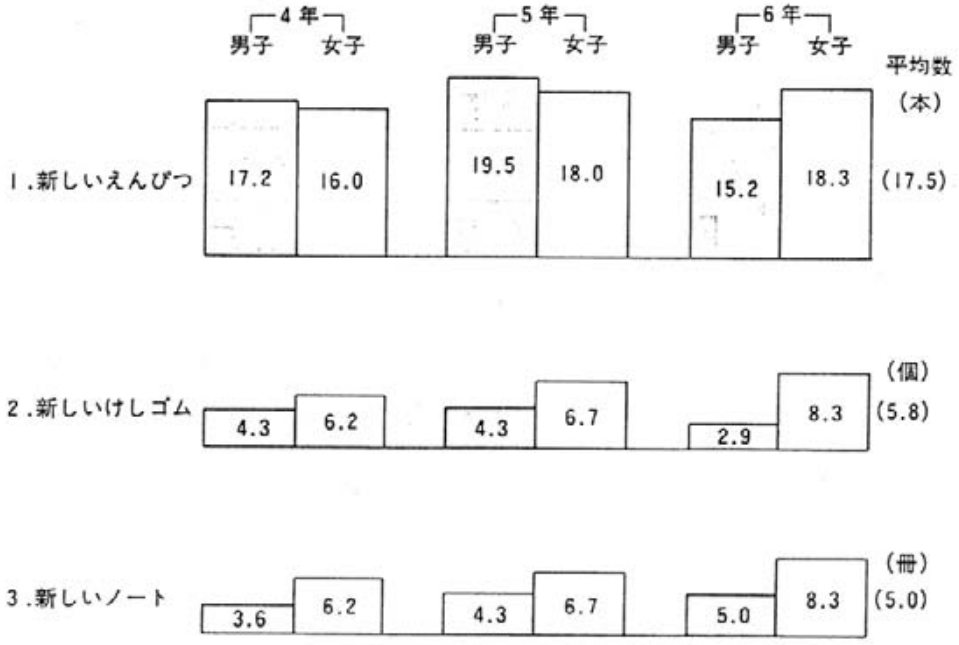
同じように、新しい鉛筆、新しい消しゴム、新しいノートのそれぞれのストックを見たのが**表2**、**図2**である。鉛筆は11～20本（24.3%）と21本以上（27.9%）とを合わせると半数以上になり、平均17.5本で、およそ1ダース半もの鉛筆を子どもたちは、ストックとしてたくわえている計算になる。同様に消しゴムは5.8個、ノートは5.0冊のストックがある。とくにこの2つの学用品は、鉛筆とちがい、男子よりも女子がたくさん持っており、さらに、学年が上がるに従い女子が持つ個数が増えていることがわかる。いずれにしても、子どもたちの周りには、数多くの学用品が、使う使わないは別としてあふれているようすがわかる。

表2　新しいもののストック

(%)

	0（ない）	1～2	3～5	6～10	11～20	21以上
1.新しいえんぴつ	5.6	5.2	14.5	22.5	24.3	27.9
2.新しいけしゴム	15.7	32.1	27.3	14.1	6.2	4.6
3.新しいノート	11.4	25.8	32.7	17.0	9.9	3.2

図2　新しいもののストック―性・学年別



2. おこづかいとの関連で

おこづかいの額

なぜ子どもたちはこれほどまでに、たくさんの学用品を手にしているのだろうか。まず、子どもたちのこづかいの額や使いみちとの関連で探っていくことにしよう。こづかいについてのデータは小学生ナウ vol. 4 －10に詳しいが、今回得られた結果を図3で見ると、71%の子どもが月に1回まとめてこづかいをもらっており、さらに、学年が上がるに従い月決めの割合が高くなってきていることもわかる。また、こづかいの額は、月に4年生で710円、5年生で948円、6年生で1,182円と学年が上がるに従ってどんどん高額になってゆく(図4)。

図3　おこづかいのもらい方

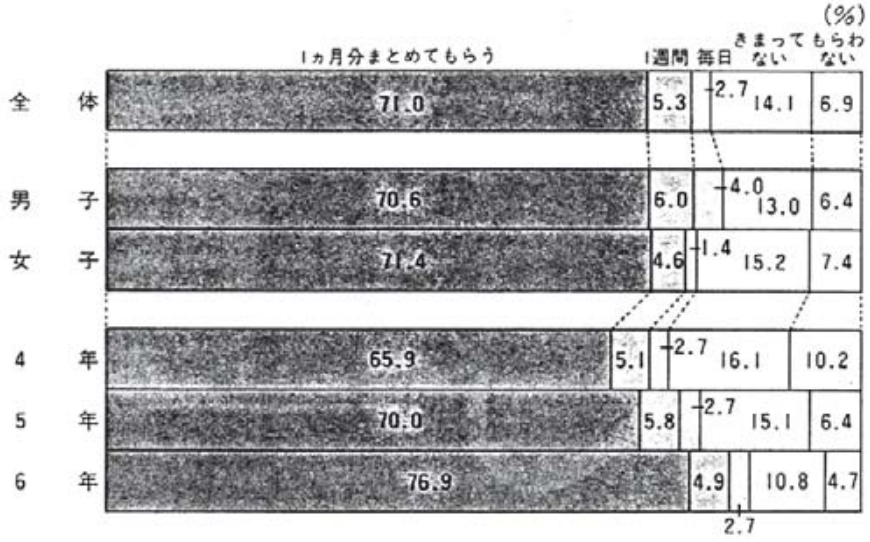
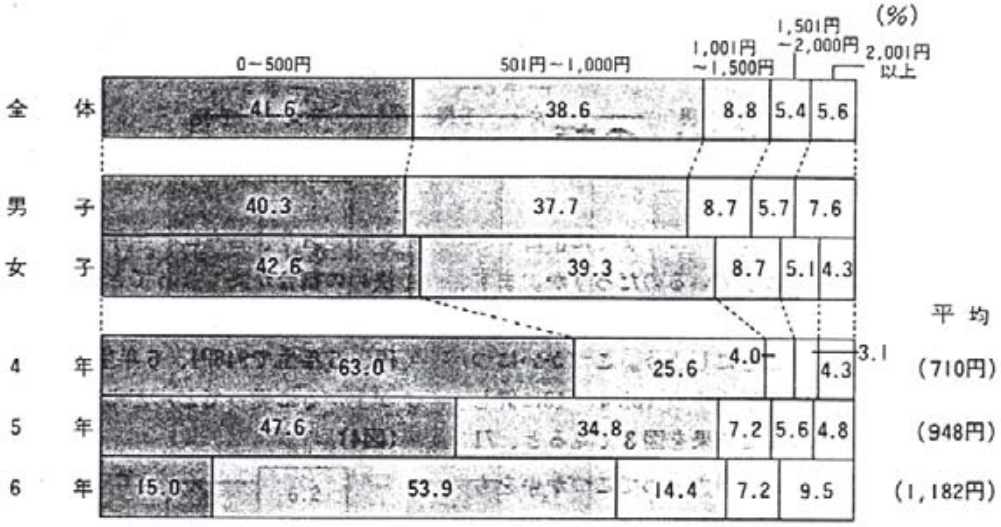


図4　1ヵ月のおこづかいの額



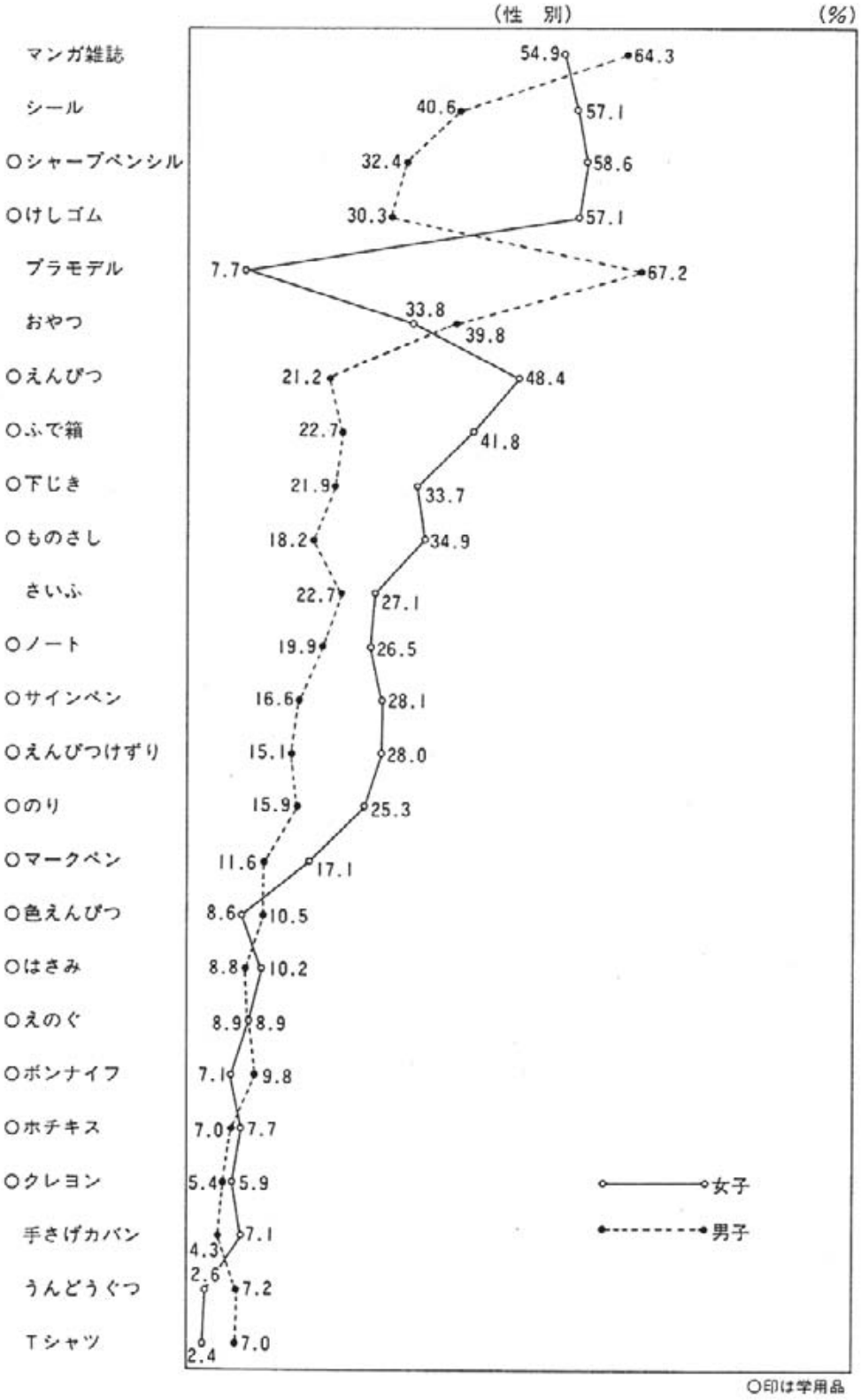
その使いみち

さて、もらったこづかいを、子どもたちはどう使っているのだろうか。図5はもらったこづかいで何を買うのかをたずねた結果である。マンガや雑誌、シール、おやつ、プラモデル(特に男子)などがまず目につくが、学用品とよばれるものもかなり上位を占めていることに気づく。ここで上位を占めているものは、先の表1、図1で上位を占めていたものと重なっている。シャーペン、ふで箱、下じきなどがその例である。図1でもそうだったが、図5を見るとどの学用品も女子のほうがよく買っている。つまり、女子はおこづかいで学用品をたくさん買うので、持っている個数が男子より多くなるのだろう。

また、図6はこづかいの使いみちを学年別に示したものだが、学年が上がるに従ってこづかいの額も上がって、子どもの買える品物の量がふえているようすがわかる。また4年、5年、6年とオモチャやおやつよりもマンガや雑誌、シャーペン、ふで箱、消しゴム、下じき等におこづかいが使われる割合が高くなっているのも注目に値する。

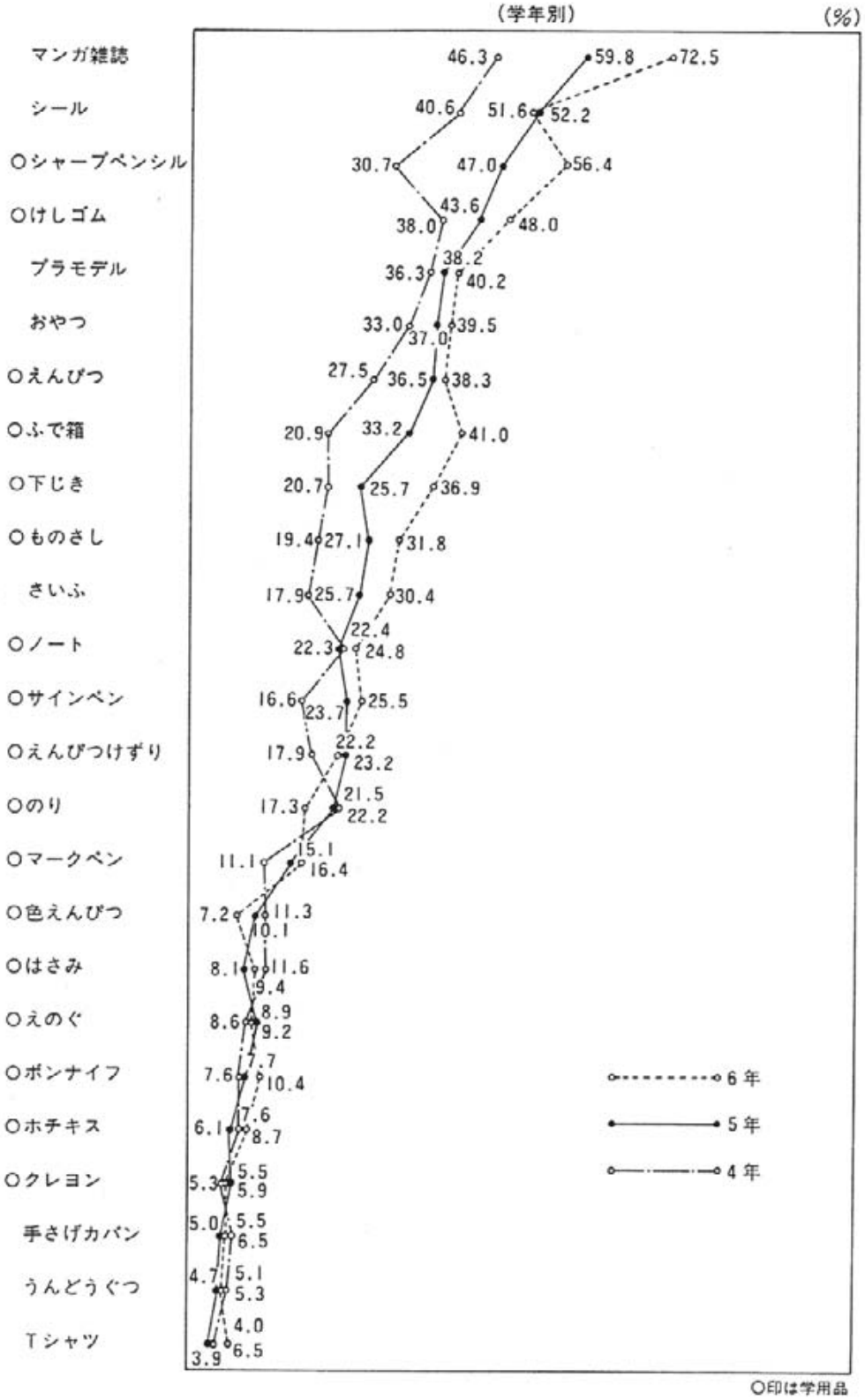
このように、学年が上がるに従い、学用品をたくさん持つようになるのは、子どもたちに「自分自身で所有するもの」の意識を、学用品を通じて高めてゆくことを意味するようにも思われる。そこで、つぎは学用品の所有感覚について、探ってみることにしよう。

図5　おこづかいで買うもの―性別



○印は学用品

図6　おこづかいで買うもの―学年別



○印は学用品

3. 子どもの所有感覚

友だちと交換してよいもの

図7は、自分の持ちものを、親にだまって友だちと交換しても許されるかどうかをたずねたものである。つまり、全くの「自分のもの」とは何かをたずねた結果と見てよいだろう。一つひとつの単価に違いがあるので、そのまま単純に比較することはできないが、鉛筆や消しゴムなどの値段が安いものは、「まあとりかえてもよいと思う」までを含めると、それぞれ52%、48%とほぼ半数になる。これに対して値段の高い百科事典、ランドセル、Tシャツ、電卓などは80%前後の高い数値で「絶対に交換してはいけない」としている。また、交換してもよいものの上位群である鉛筆やマンガ、下じきなどは、先の図5、図6などで明らかなように、自分のこづかいで買っているものである。子どもたちは、自分のこづかいで買ったものは、自分の責任において交換してもいいと判断しているようだ。この点は図8を見ると、もっとはっきりする。学用品のためにあまりこづかいを使わない4年生の男子が「交換してもよい」という割合が最も低く、逆に6年生の女子が、ほとんどの項目で最も高い割合を示している。自分で買ったものという感覚があるからこそ、自分の自由になると考えているようだ。

次に図7の親に許可を得ないで「交換しても平気かどうか」と「こづかいの額」「こづかいのもらい方」のそれぞれの関連をみたのが表3である。表3の①からわかるように、こづかいの額が多くなるほど、「交換してもよい」と思う割合が、どの項目でも高くなっている。特に1001円以上おこづかいをもらう子どもたちは、鉛筆や消しゴムなどを「交換してもよい」と60%近くが思っていることがわかる。また、表3の②から、こづかいをもらっていない子どもはほとんどの項目で、「交換して

はいけない」と思う割合が高くなっている。このように、学用品等の品物の価値意識や所有感覚は、こづかいの額やもらい方に大きく左右されることがわかる。このようなことから、ものを大切にしない我が子をもつ母親は、もう一度こづかいの額や与え方を考える必要があるかもしれない。これらのデータから現代において、ものに価値を持たせることがいかに難しいかということの一端をかいま見た気がする。

図7　友だちと交換してよいもの

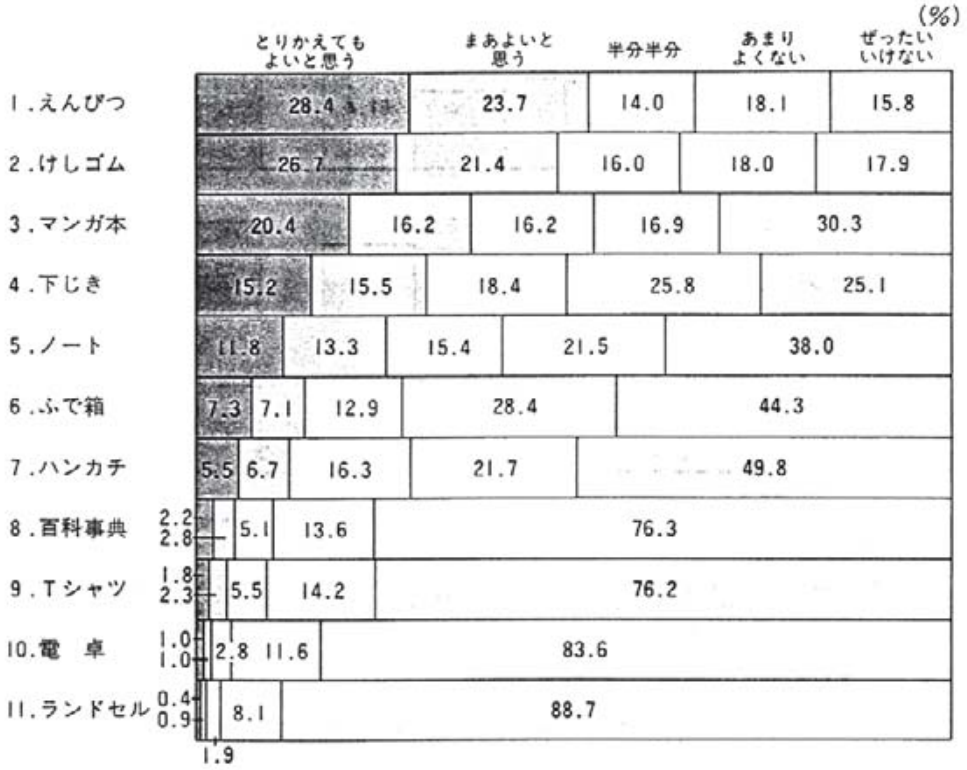
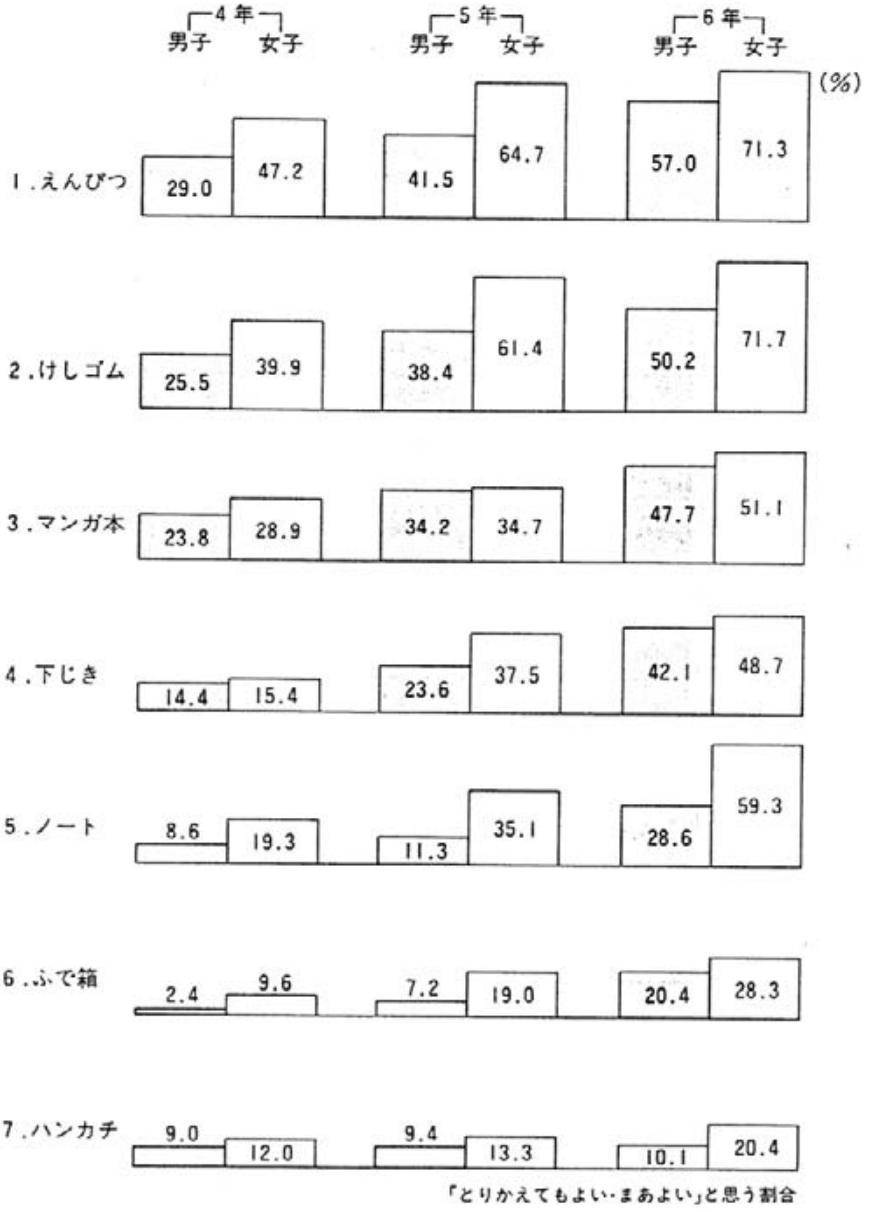


図8　友だちと交換してよいもの一性・学年別



「とりかえてもよい・まあよい」と思う割合

表3－① おこづかいの額×交換してもよい割合(よい・まあよいと思う割合)

(%)

項目＼こづかいの額	0～500円	501～1,000円	1,001円～以上
ランドセル	0.6	1.1	2.1
えんぴつ	46.5	56.6	59.7
けしゴム	41.9	51.5	58.3
下じき	22.8	35.3	42.0
ふで箱	10.1	18.6	17.0
ノート	19.3	29.3	35.0
電卓	1.9	1.4	2.6
Tシャツ	2.6	3.6	7.2
百科事典	4.6	4.2	6.3
マンガ	32.1	40.1	44.0
ハンカチ	10.4	12.0	16.9

表3－② 交換するのはよくない(あまり・絶対よくないと思う割合)×おこづかいのもらい方

(%)

項目＼こづかいのもらい方	もらわない	必要なとき	毎日＋1週間分	1ヵ月ぎめで
ランドセル	100	92.9	94.3	97.7
えんぴつ	(46.7)	34.2	38.4	32.1
けしゴム	(45.6)	33.0	42.1	34.7
下じき	(62.0)	49.4	51.9	50.0
ふで箱	(81.6)	70.4	75.5	71.9
ノート	(67.4)	63.6	60.3	57.6
電卓	96.7	91.2	96.1	96.0
Tシャツ	92.3	84.5	88.6	92.0
百科事典	91.3	84.9	90.4	91.1
マンガ	(58.7)	48.9	44.7	45.7
ハンカチ	(79.3)	66.5	67.9	71.7

◯印は最大値

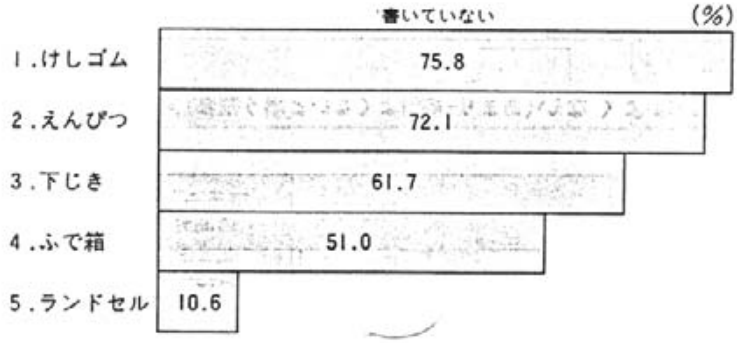
学用品の記名率

このような「友だちと交換しても親に叱られない」もの、つまり「自分のもの」という感覚は、では「自分のものだから大切に」、という態度とつながるものなのか。

図9は、学用品の記名率である。図が示すように、現在子どもが毎日のように使う学用品5種類のうち、ダントツに記名がされているのはランドセルの9割だけ。これもむろん1年生の時に親が記名したものが残っているに過ぎないのだろう。あとの日常的に使用している学用品は、ふで箱ですら5割しか名前がついていないし、消しゴム、鉛筆に至っては、7割以上が名無しの権兵衛である。しかもそれは図10に示したように、学年を追ってふえてゆく。

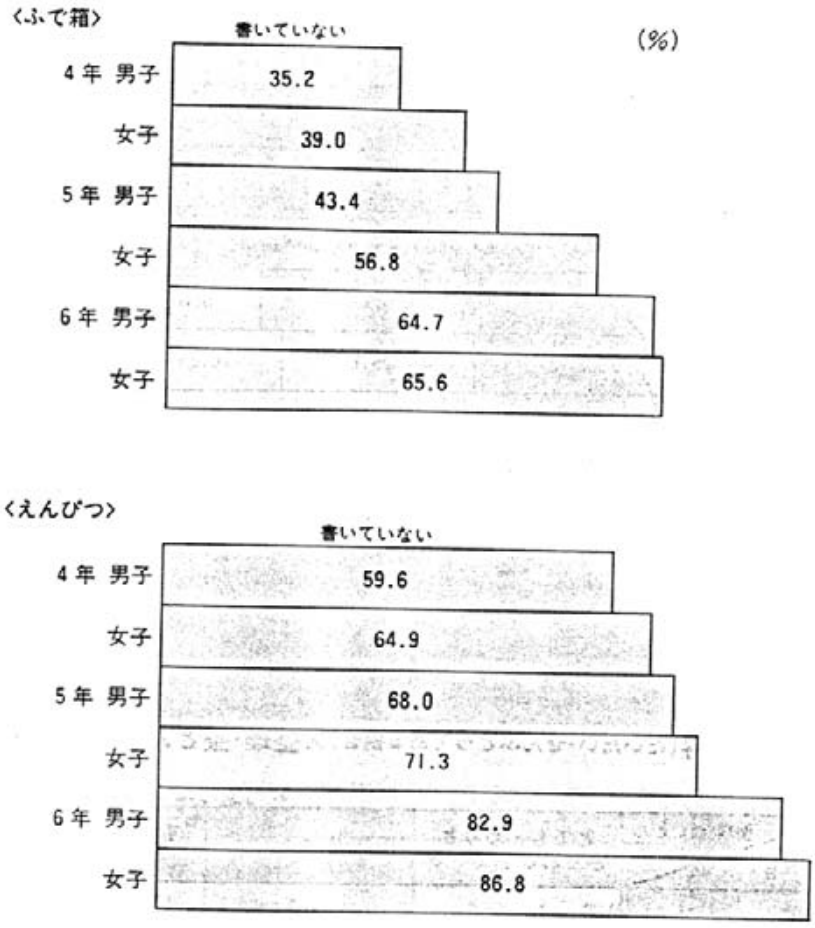
とすると、「自分のもの」とは「自分に所有権のあるもの」という感覚であって、記名をして紛失を防ごうとするような、「大切なもの」の感覚ではないことがわかる。

図9　学用品に名前が書いてあるか



※2は、「書いていないのが多い」+「ぜんぜん書いてない」を「書いていない」としている。
※4は、「ついていない」+「ついているものといないものとがある」を「書いていない」としている。

図10　記名率(学年差)



大切なものは何か

では子どもが本当に「自分のもの」と感じてもいいような品物、お金で買えないものについての感覚を見てみよう。図11は、表彰状や図工の作品などをどのように保存しているかをたずねたものである。「だいたいとってある」を含めると、表彰状で87%、通知表で74%(これは、親に保存してもらう割合が高いだろう)と自分の努力で得た結果を大切に保存しているようだ。図工の絵やテストなどもおよそ60%が保存していると答えている。お金で買える学用品とは、やはり価値がちがうと子どもたちは判断しているのかもしれない。また、保存状況と整理・整頓の得意さとの関連を見たのが表4である。きちんと整理・整頓のできる子は、どの項目もしっかり保存していると答えている。ものを大切にする心や態度を育てる上でも、ふだん学校でよく言われる、整理・整頓のしつけの必要性が改めて感じさせられる。

図11　お金で買えないものの保存

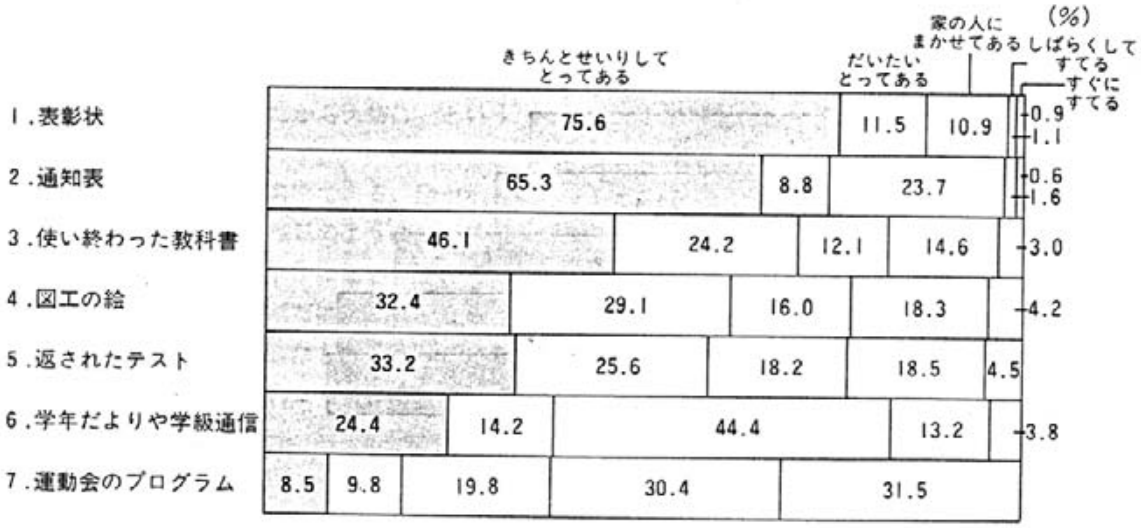


表4　返却物の保存(だいたい・ぜんぶとってある割合)×整理・整とんがじょうず

(%)

項目＼整理・せいとん	とても・わりときちんとしている	ふつう	すこし・とてもだらしない
返されたテスト	64.8	57.8	54.3
図工の絵	68.9	63.1	52.4
使い終わった教科書	74.3	72.4	64.0
学年だより・学級通信	46.5	37.5	31.5
通知表	76.8	74.1	71.5
運動会のプログラム	24.5	16.4	14.3
表彰状	89.9	86.8	74.4

4. いま子どもの使っているもの

ふで箱のなかみ

ところで、子どもたちは、実際に毎日どんな学用品を使っているのだろうか。まずは、学校に持ってきているふで箱の中を見てみよう。今、(このアンケートに答えた時点で)子どもたちのふで箱に入っているものをたずねてみた。ひところは、ふで箱の中には、黒の鉛筆が3～4本、赤鉛筆が1本、消しゴムが1個というのが相場で、それに時たま定規や小さな鉛筆けずりが入っている程度だったが、最近のふで箱の中には実にさまざまなものが入っている。表5から最近のそのような傾向の一端がうかがえよう。黒、赤の鉛筆と消しゴムの外に、サインペン(55%)、ボールペン(42%)、マークペン(22%)、シャープペンシル(23%)、鉛筆けずり(16%)、定規(71%)、シール(20%)など、実に多彩である。ふで箱のオモチャ箱化、とでも言えそうな状況である。

また図12を見るとおもしろいことに黒の鉛筆と赤鉛筆は学年を追うに従って減少し、そのかわり、シャーペンとボールペンやサインペンの使用が増えてゆく。これは、図13、図14でよくわかる。6年生にいたっては鉛筆、赤鉛筆ともかなり使用する割合が減っている。6年生の言葉をかりるならば、鉛筆は「削るのがめんどくさい」「ふで箱が芯のためによごれる」「あまりおもしろみがない」「カッコわるい」など鉛筆離れの傾向を示している。電動の鉛筆削りの隆盛のためばかりでなく、ここにもナイフを使って鉛筆を削ることのできない現代っ子の原因がうかがえるようだ。

表5　ふで箱のなかみ①

(%)

項目＼個数	0(ない)	1　個	2～3個	4～5個	6～7個	8～9個	10個以上
1.(黒の)えんぴつ	3.2	2.6	11.9	40.6	24.8	9.2	7.7
2.けしゴム	1.3	73.6	21.9	2.3	0.3	0.1	0.5
3.サインペン	45.2	36.3	10.4	3.6	2.4	1.0	1.1
4.赤えんぴつ	30.6	60.2	8.7	0.4	0	0	0.1
5.ボールペン	58.4	26.8	11.3	2.4	0.9	0.1	0.1
6.マークペン	78.0	9.0	6.8	2.9	1.9	0.6	0.8
7.シャープペンシル	77.2	8.9	7.8	4.1	1.5	0.3	0.2
8.えんぴつけずり	83.9	13.5	2.3	0.1	0.2	0	0
9.定　規	29.5	70.5					
10.シール	79.9	20.1					

図12　ふで箱のなかみ②—性・学年別

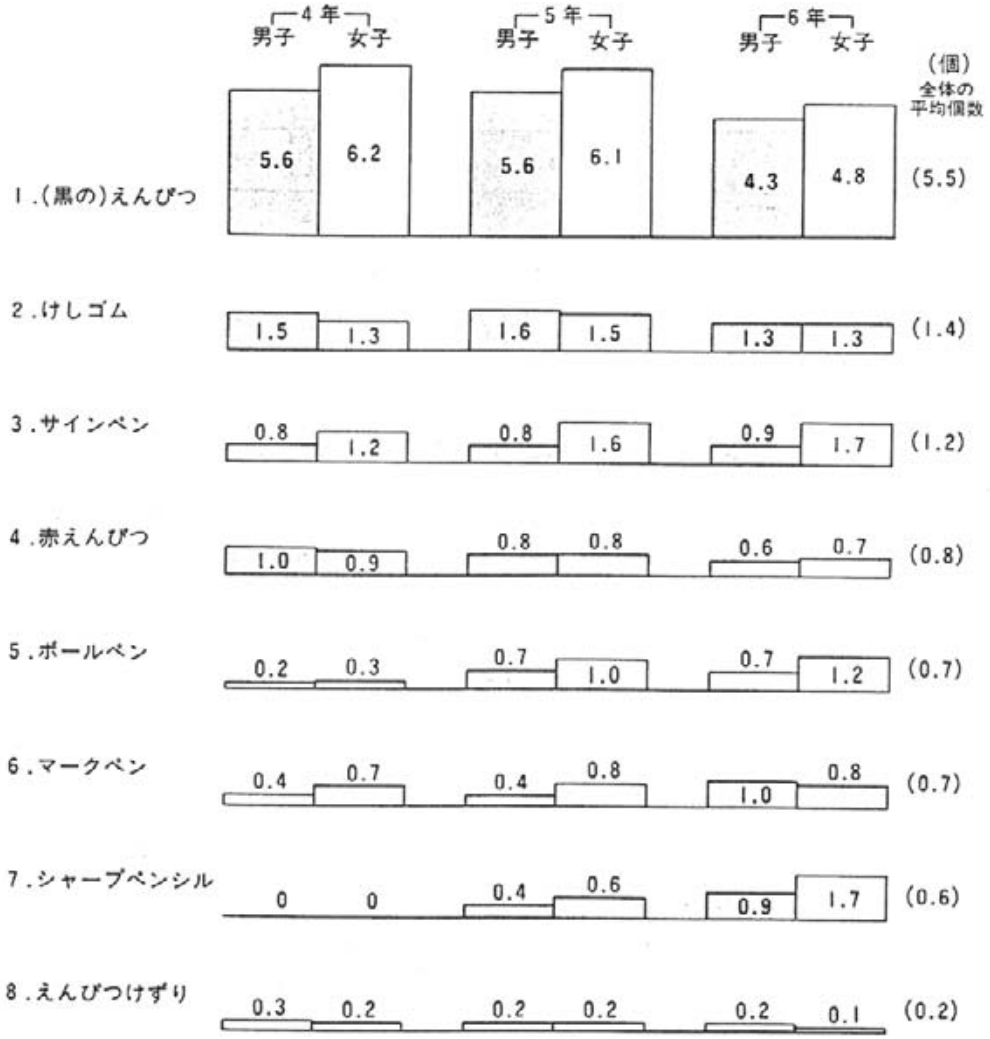


図13　テストの○つけに使うもの

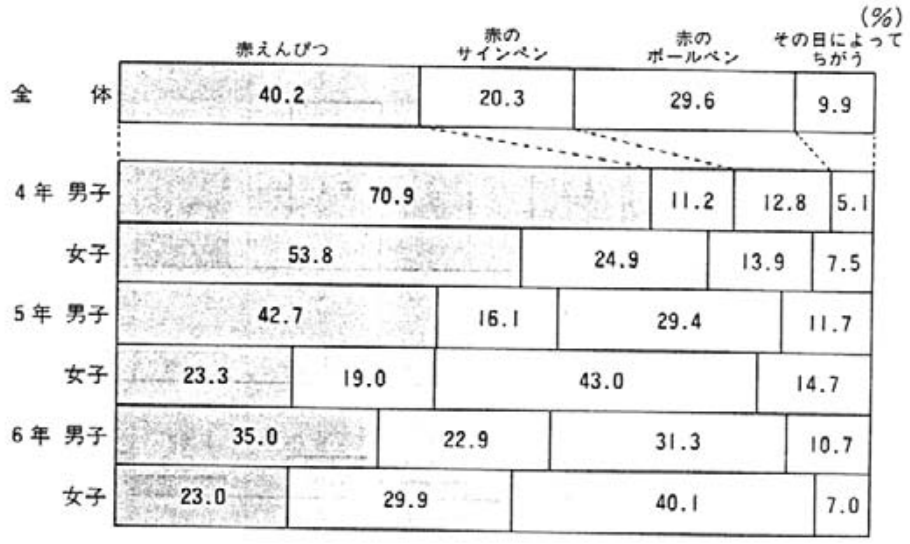
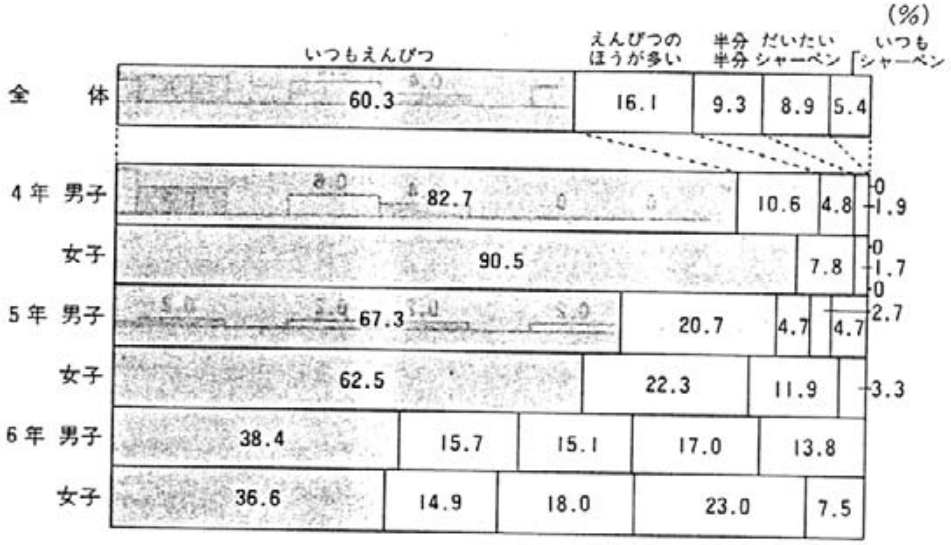


図14・鉛筆とシャープペンシルの使用頻度



ふで箱の種類

さて、それらを入れているふで箱はどうなっているのだろう。図15からわかるように、80%近くがカンペン(アルミ製のふで箱)を使用している。流行とはいえ、圧倒的な多さには驚かされる。昔ながらの布製のものや、ビニール製のものなどは、6年の女子にいたっては約10%。図16は、ふで箱にいろいろな装置がついているかどうかで、30%ほどが装置をそなえている。特に多かったのは、2段式のもので39%、中には5段式やゲーム付きのもの、においの出るものまであった。これらの装置は、ほとんどカンペンについている。

また、ふで箱に絵やマンガ、模様などがついているかをたずねたのが図17である。全体では4人中3人までがついていると答えているが、5、6年の女子にいたっては、9割もの高い割合を示しているのに驚かされる。表6からもわかるとおり、絵や模様が非常に多種多様で2つと同じものがないほどである。これらは、子どもたちの個性のあらわれか、それとも商業ベースにうまくのせられているためだろうか。

以上のことを、こづかいのことと関連させて考えると、ふで箱の機能は二の次。まず絵柄や付属装置の有無で、どんなものを買うかを決定していると考えられ、いわゆるファンシー商品まで、学用品の中に含まれるようになってきている。図18に示した、シールの有無などもそのあらわれだろう。

図15　ふで箱の材質

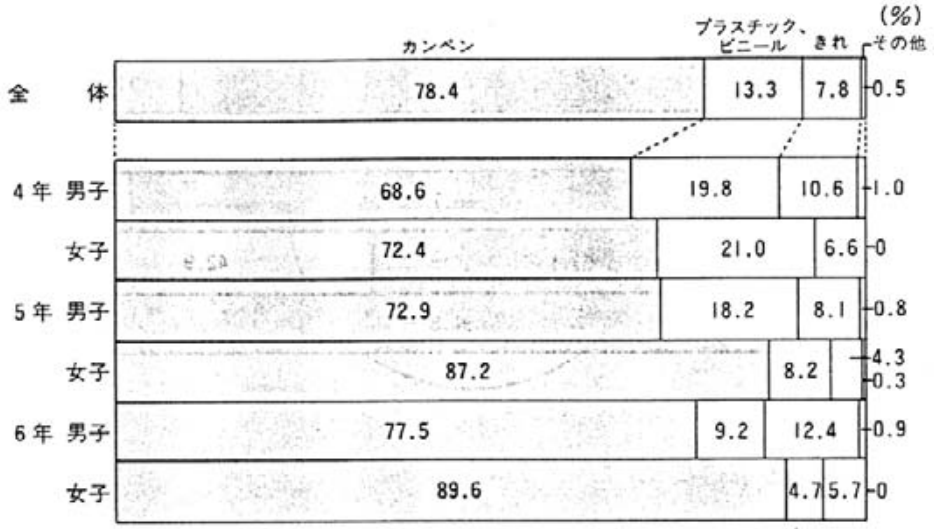


図16　ふで箱の装置

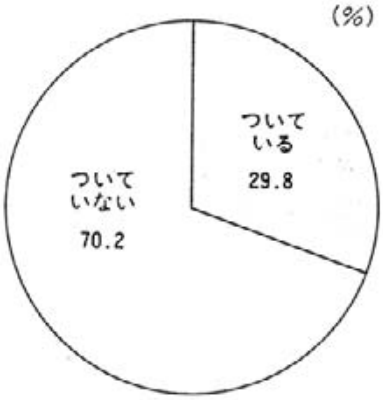


図17　ふで箱にマンガや絵がついているか

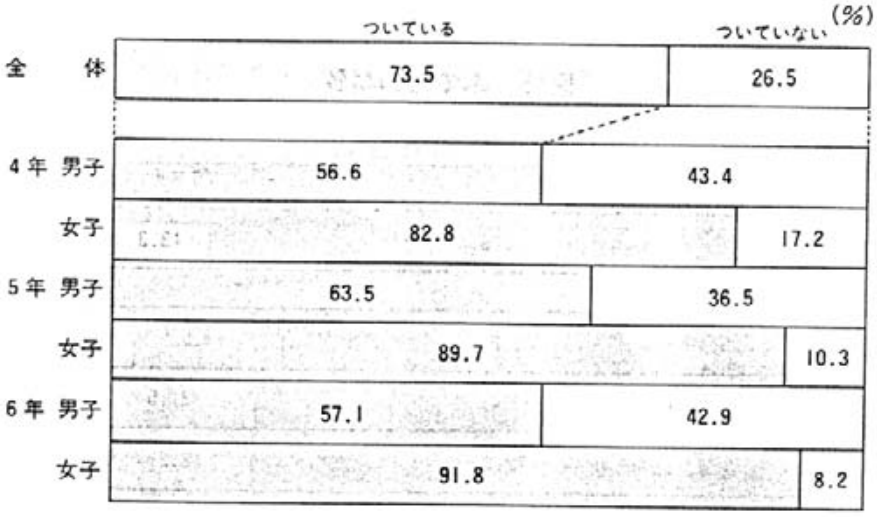
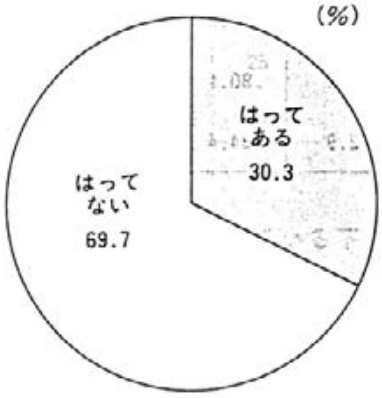


表6　ふで箱にえがかれている図柄

スペースシャトル	ブルートレイン	ＵＦＯ	ホットドッグ
ハンバーガー	菊池桃子	海	水兵さん
バイク	ドナルドダック	テルテルボウズ	中森明菜
野球	ゴーストバスターズ	トムとジェリー	びっくり箱
ＢＯＸＹ	サッカー	カラス	バスケット
ラグビー	スヌーピー	キャプテン翼	コアラ
恐竜	にんきもんやねん	ペンギン	さてんのにーちゃん
ウォークマン	牛	鬼	スーパーカー
ミイラ	いちご	ウルトラマンキッズ	ブタ
エリマキトカゲ	うちのタマ知りませんか	ＫＹＯＮ^2	にんじん
犬	ばんどくん	ゴルフ	（その他多数）
ライオン	水兵さん	ポパイとオリーブ	
トラック	チェッカーズ	パックマン	
とうめいくん	ゴロピカドン	キン肉マン	
ミッキーマウス	クッキーの作り方	ゴジランド	

（自由記述のまま）

図18　ふで箱にシールがはってあるか



鉛筆、下じき、消しゴム

次に、黒の鉛筆についても、同様に見ていこう。**表7**は、今使用している鉛筆の硬さだが、79%と圧倒的にＨＢが多い。それに、学年が上がるに従って、軟らかいものから、硬いものへ移っていくこともわかる。ところで、鉛筆にもふで箱同様に絵や模様のついているものが多い。そこで**表8**は、鉛筆の絵や模様についてたずねた結果である。男女の差がはっきりしていて、女子のふで箱には、絵や模様のついた鉛筆が多く、男子のふで箱にはごく普通の鉛筆が多く入っていることもわかる。

同様に図19は、下じきについてだが、すでに見てきたように、１人平均４枚の下じきを持っている子どもたちだが、学校に持ってくるのは、１枚程度で、ごく普通のプラスチック製の１枚ものが主流のようだ。また消しゴムは色つきのものが多く(65%)、なんらかのケースに入っていて(57%)、その傾向は、やはり女子に顕著である。(図20)

表７　主に使用しているえんぴつの硬さ

(%)

学年＼硬さ	２Ｈ	Ｈ	ＨＢ	Ｆ	Ｂ	２Ｂ	その他
全体	1.5	3.5	78.9	0.5	11.7	3.5	0.4
４年	2.6	2.0	70.9	0.5	15.3	7.9	0.8
５年	0.5	4.9	80.1	0.5	11.4	2.2	0.4
６年	2.0	2.9	84.4	0.5	8.8	1.2	0.2

表8　えんぴつのもよう

1.マンガや絵のもようのついているもの　(%)

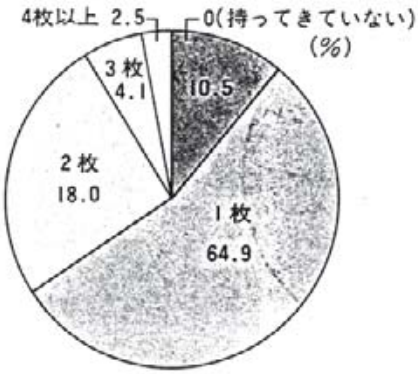
学年・性＼本数	0本(ない)	1本	2～3本	4～5本	6～7本	8～9本	10本以上
全　体	17.0	11.7	20.3	25.3	11.3	4.1	10.3
4年 男子	23.9	19.0	27.0	19.0	6.1	0.6	4.4
女子	3.4	6.2	14.7	41.3	13.6	5.1	15.7
5年 男子	28.5	16.4	22.8	15.0	7.5	2.8	7.0
女子	4.8	6.7	17.9	29.0	17.1	8.9	15.6
6年 男子	42.2	15.6	17.5	16.2	3.9	0.6	4.0
女子	6.9	17.2	28.1	28.7	8.0	3.4	7.7

2.緑や茶などふつうおとなの人が使うもの　(%)

学年・性＼本数	0本(ない)	1本	2～3本	4～5本	6～7本	8～9本	10本以上
全　体	24.5	14.2	22.6	19.5	7.9	2.7	8.6
4年 男子	14.7	11.3	24.9	24.9	10.7	2.9	10.6
女子	32.8	19.7	27.8	6.5	4.9	0.8	7.5
5年 男子	14.3	13.9	21.8	25.2	12.6	3.9	8.3
女子	33.2	20.1	17.6	14.5	4.5	2.5	7.6
6年 男子	16.9	8.7	25.7	25.1	10.4	3.3	9.9
女子	43.9	12.2	20.2	14.4	0.7	1.4	7.2

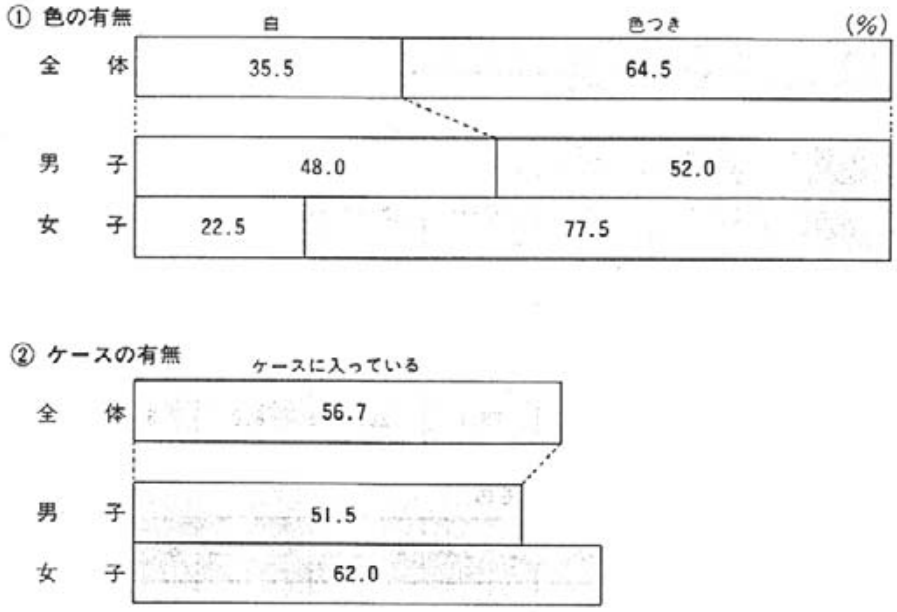
図19　学校に持ってきている下じき

① 下じきの枚数



②下じきの種類

図20　ふで箱の中のけしゴム



ランドセルと机

学校に行くときにランドセルを使用している子どもは全体としておよそ80%だが、6年生になると手さげカバンを使用する割合がぐっと高くなることもわかる。(図21)

図22は、家で使っている机についてたずねたもので、ひと頃は、スチール製が流行していたが、現在は木製のデスクがほとんどのようだ。

以上、子どもをとりまく学用品の実態について、見てきた。現在では、学用品は勉強するためのものだけではなく、遊んだり、楽しんだりする要素が多く含まれるようになってきている。これは、学校・家庭・塾などで子どもたちが勉強する時間が増え、遊びが減った分だけ、いつも一緒にいる学用品に遊びの要素を子どもたち自身で要求しているためであろう。ストレスのたまるつまらない勉強や授業から、一瞬でも楽しい世界へ自分たちを運んでくれるのが、現在の学用品の意味かもしれない。

図21　学校に行くときのカバン

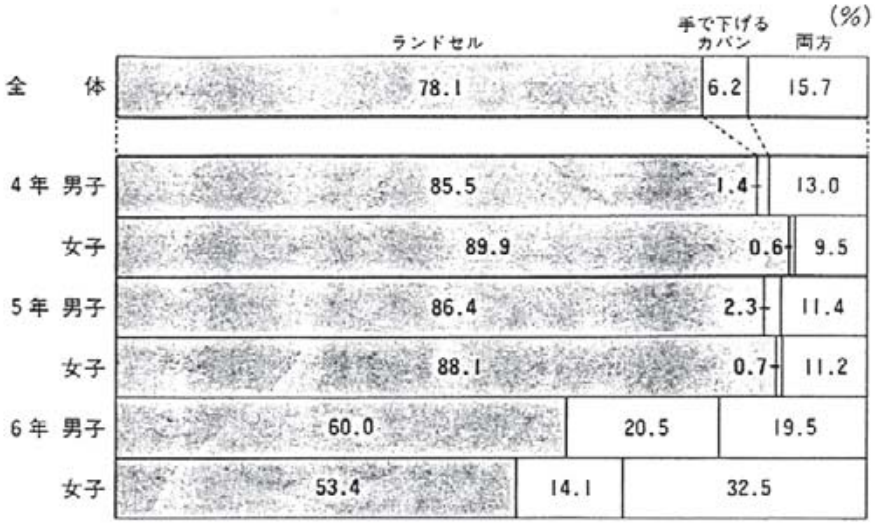
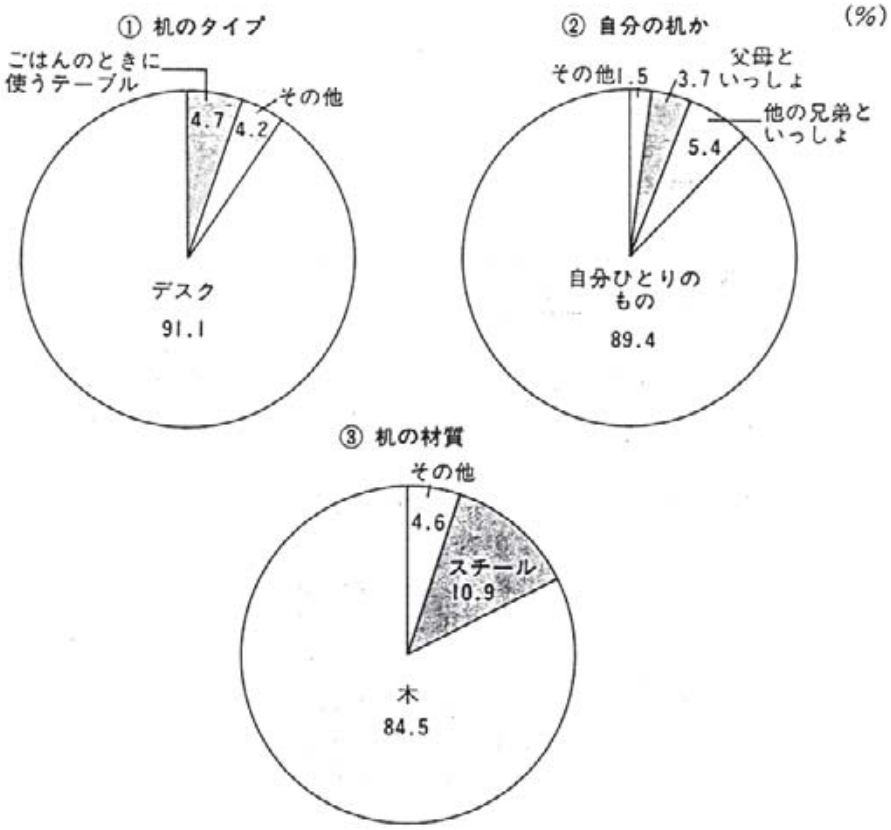


図22　使用している机について



5. 学用品と子どもの愛着

学用品が、子どもの領分の中にいる親しい「友だち」であり「オモチャ」「ホビー」としての要素も持っているようすを見てきたところで、これらの「友だち」に対する愛着の度合いを見てみることにしよう。いったん手に入れた学用品を、子どもはどのくらい大切に思い、いつまで使っていくつもりなのだろうか。

学用品のルーツ

さて、子どもたちは、今持っている学用品をどのように手に入れたのか、親に与えられたもの、自分で手に入れたものなど、図23、表9、図24、図25、図26は、それぞれの学用品のルーツである。図23からわかるように、机は、子どもたちの66%が勉強のために新しく買ってもらっている。父親や兄弟などのおさがりも34%とけっこう多い。

ふで箱、下じきは学年が上がるに従い、自分で買う割合が高くなり、6年生では4割にも達し(図24、図25)、親に買ってもらう割合が減少していく。これは、先に述べたこづかいの使い方(図5、図6)からもわかるとおりである。

鉛筆については、表9と同時に見るとはっきりする。家の人に買ってもらった本数は図26の3から、しだいに減っていくが、その分自分で買う本数が増えるわけではない。鉛筆がふで箱や下じきと状況が違うのは、鉛筆の代わりに、子どもたちが、シャーペンを買うようになるのである。

図23　机の手に入れ方

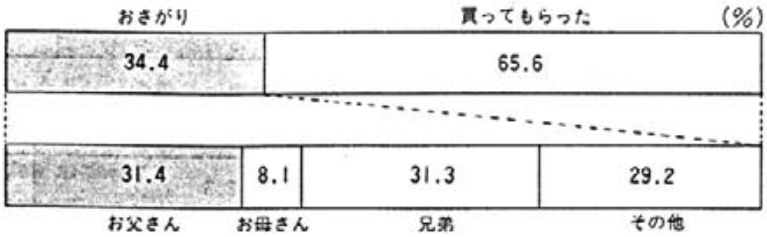


表9　えんぴつの手に入れ方と本数

(%)

手に入れ方＼本数	0本(ない)	1本	2～3本	4～5本	6～10本	11本以上
1.自分で買ったもの	39.6	12.2	16.4	15.5	10.4	5.9
2.友だちと交換したりもらったもの	49.7	16.8	15.6	10.9	4.5	2.5
3.お父さん・お母さんに買ってもらったもの	20.6	9.4	16.4	18.6	15.7	19.3
4.その他	42.8	11.6	16.3	14.8	8.4	6.1

図24　ふで箱の手に入れ方

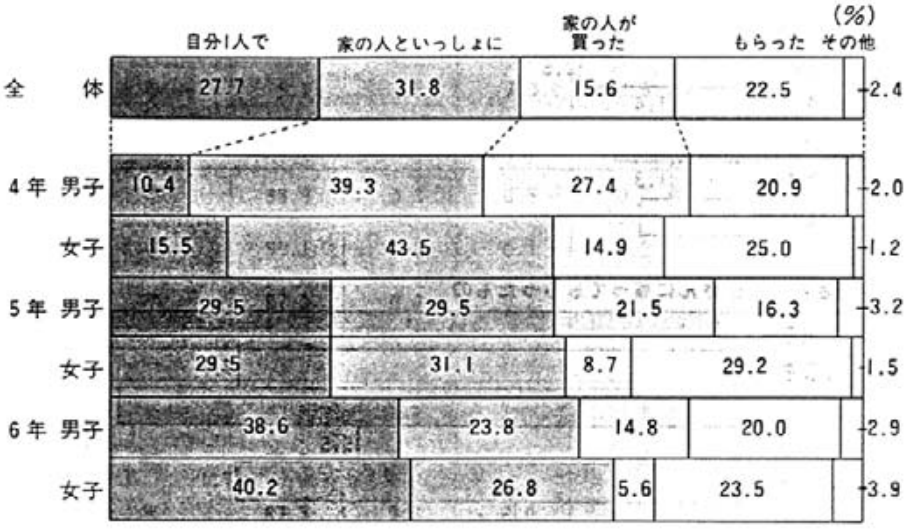


図25　下じきの手に入れ方

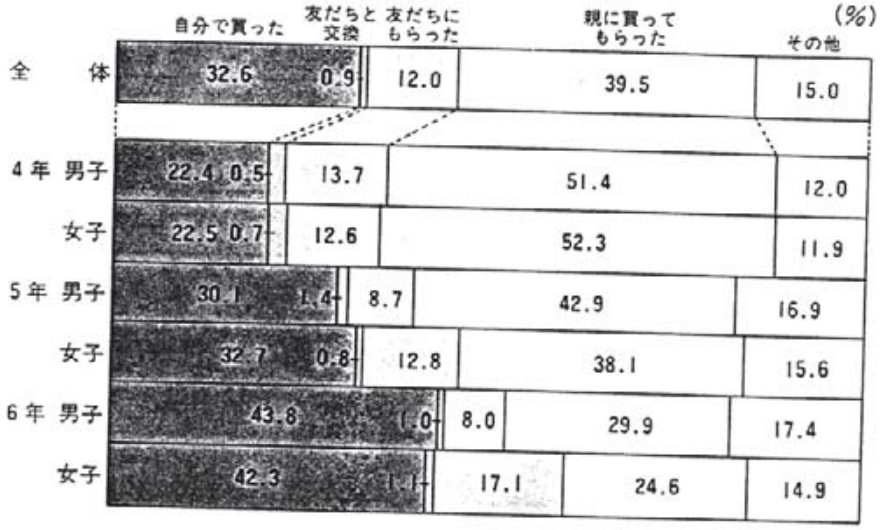
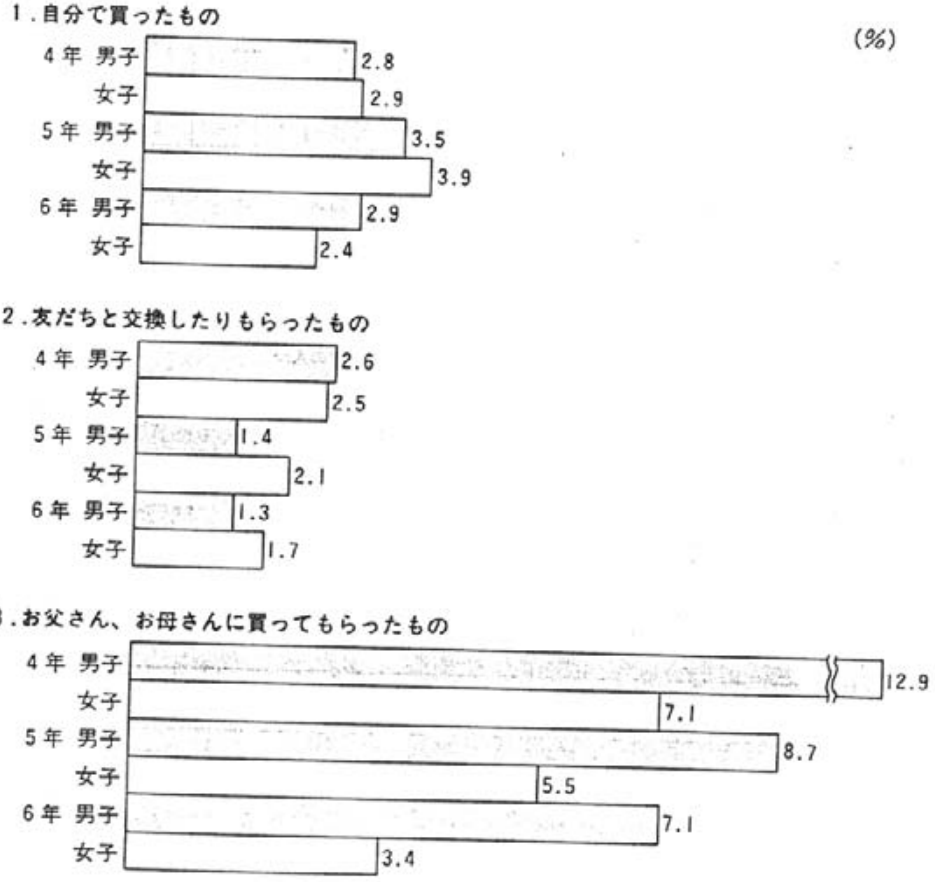


図26　えんぴつの手に入れ方―性・学年別



いつから使っているか

さてそうしたルーツの品々が自分のものとなってから、どのくらいの歳月が流れたか。比較的長期的に使われてもよいと思われるものについて、たずねてみた。

表10によれば高額なランドセルや机は1年生の頃からずっと使っている子がほとんどだが、値段が安く、こづかいで買えるふで箱や下じきは、何度も新しいのにかわっていることがわかる。本調査は60年の6月に行われているが、現在の学年になって3カ月ほどで、新しいものにしている子がすでに3分の1以上もいる。特に6年生の持つふで箱は、54%もの割合で、6年になってから買ったものであることがわかる。さらに、前の学年と合わせてみると、実にふで箱で、4、5、6年の順におよそ78%、82%、88%、下じきでは、69%、72%、74%という高い数値を示した。つまりふで箱や下じきのような学用品は、長く使っても1年程度で、学年がかわれば、また新しいものを買って使う傾向にあるようだ。もちろん1年生の頃からずっと使っている物もちのよい子もいるが。

表10　今使用している学用品は、いつから使用しているのか

(%)

1.ふで箱	入学前・1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
4　年	12.2	9.6	39.6	38.6	—	—
5　年	5.1	3.1	9.6	36.5	45.7	—
6　年	2.9	0.7	1.9	6.5	34.1	53.9
2.下じき						
4　年	18.5	12.8	33.4	35.3	—	—
5　年	10.5	4.7	13.0	39.4	32.4	—
6　年	5.7	3.5	7.0	9.5	33.2	41.1
3.ランドセル						
4　年	98.9	0.3	0.5	0.3	—	—
5　年	99.1	0.2	0.1	0.2	0.4	—
6　年	97.0	0.4	0.2	0	1.6	0.8
4.机						
4　年	95.6	2.9	1.1	0.4	—	—
5　年	93.2	2.1	1.3	2.4	1.0	—
6　年	87.3	3.8	4.0	2.5	1.1	1.3

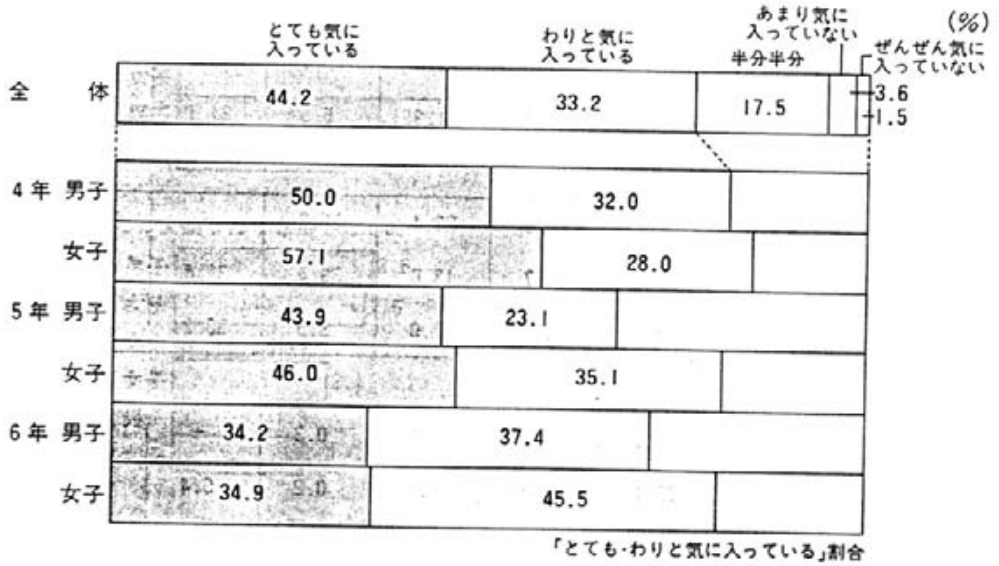
学用品への愛着の度合い

さて自分の手の中で、それぞれの年月のつき合いを重ねた品々に対して、子どもはどのくらい、愛着を抱いているのだろうか。ふで箱を例にして見てみよう。

まず図27は、現在使っているふで箱を、気に入っているかどうかたずねたものだ。全体としては、44%もの子どもが「とても気に入っている」と答え、「わりと気に入っている」も33%。合わせると8割近くが、気に入っていると答えている。おもしろいのは、学年と共に気に入っている割合が、少しずつ減っていく点だ。高学年になるほど、目が肥えて、理想と現実のギャップが出てくるのかもしれない。

しかしさらにおもしろいのは図28だ。気に入っていると言っていながら、「親がもし新しいのを買ってあげると言ったら」とたずねると、なんと5割もの子が、「大よろこびで新しいのを買ってもらう」と答えている。「せっかくだから買ってもらう」を合わせると7割強の子が、気に入っているはずのふで箱を買い換えると答えている。気に入っているといっても、あまりあてにならない気もする。だからこそ表11にあるように、子どもは次つ

図27　ふで箱は気に入っているか



ぎとふで箱を買い換えるのだろう。入学して以来ずっと同じふで箱を使っている子は、ゼロに近い。例によって女子のほうが男子より買い換えの度が多いし、6年生になると、「すでに5つ目以上」と答える子が、男子で46%、女子で76%もおり、毎年4人に3人は、ふで箱を換えている計算になる。

しかし表12に見られるように、「いつまでも使っていたい」とする子もいないわけではない。ただしその割合が、学年と共に大きく減っていくことが、図29よりわかる。ものに対する愛着心は、このくらいの年齢では、年齢の低い子のほうが強いのか。ただし図30によると、古いふで箱を「すぐ捨てる」子もほとんどいない。4年で70%、5年56%、6年38%の子どもが「一生大切にとっておくつもり」と答えている。

また図31が示すように、今使っている机も、5割の子が一生使いたいと言い、ランドセルもほとんどの子が卒業まで使いたいとし、その後も一生とっておきたい、とする子も4割近くいる。(図32、図33)

そしてその気持ちは、長い間使ったものに対してばかりではない。図34、図35によれば、古い下じきやちいさくなった鉛筆でも、いつまでもとっておく、と答える子が5割に達している。しかもすでにふで箱で見てきたように、ここでも学年の下の子どものほうが、「ずっととっておく」気持ちが強い傾向が見い出される。ちいさくなった鉛筆を例にとれば、その割合は、58%、48%、38%と学年が上がるにつれてはっきり減少してゆく。消費社会の中で、モノへの愛着を振り切って、捨てる感覚を身につけてゆくのかもしれない。

図28　新しいふで箱を買ってあげると言われたら

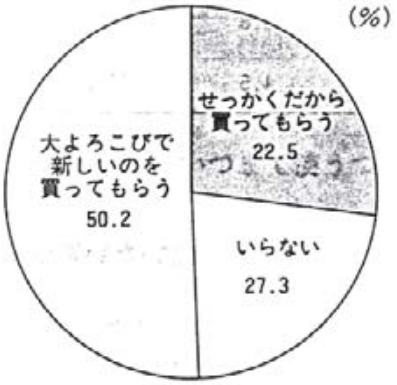


表11　何個めのふで箱か

(%)

学年・性＼個数	1個目	2個目	3個目	4個目	もっとたくさん
4年　男子	7.7	21.6	33.7	19.2	17.8
女子	2.2	16.6	24.9	24.3	32.0
5年　男子	3.8	15.6	28.5	20.9	31.2
女子	1.1	7.0	16.8	23.5	51.6
6年　男子	1.8	6.3	23.5	22.6	45.7
女子	1.1	1.1	9.5	12.6	75.8

表12　いつになったら新しいふで箱ととりかえるつもりか

(%)

学年＼時期	近いうちに	卒業までに	中学生	高校生	ずっと使う
4　年	19.8	14.2	24.3	2.8	38.9
5　年	30.9	8.6	35.6	1.7	23.2
6　年	29.4	1.5	53.7	1.2	14.2

図29　今のふで箱をずっと使いたい割合―性・学年別

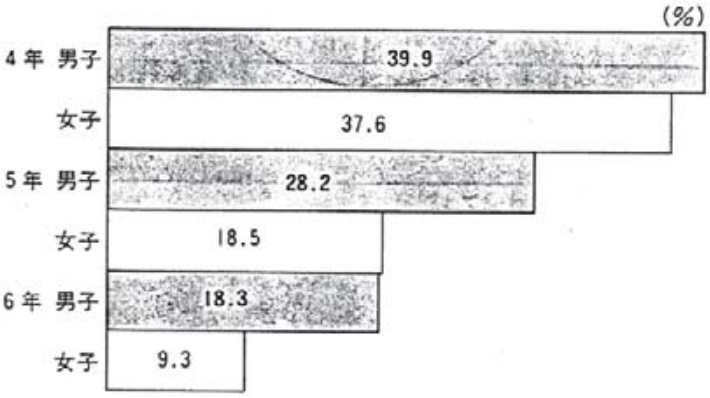


図30　古いふで箱はどうするか

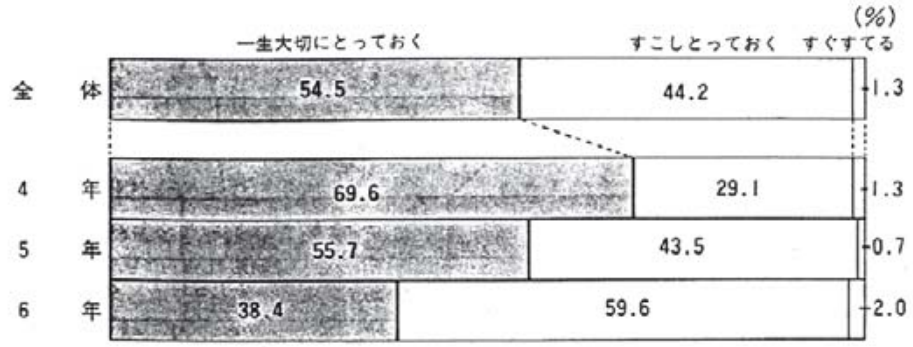


図31　いつ新しい机にかえるか

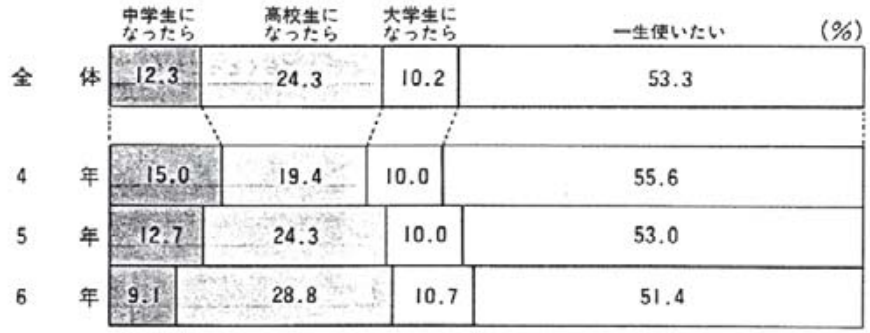


図32　ランドセルをいつまで使うつもりか

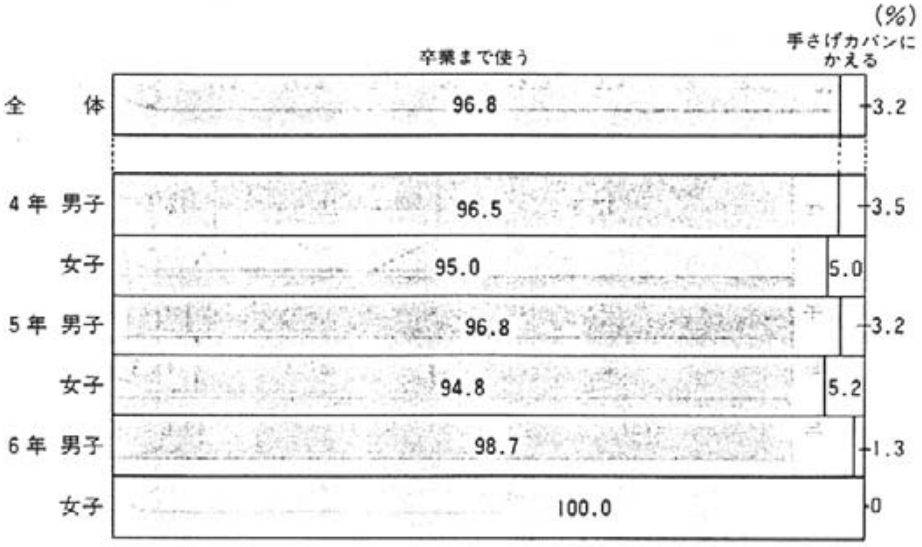


図33　古いランドセルをどうするか

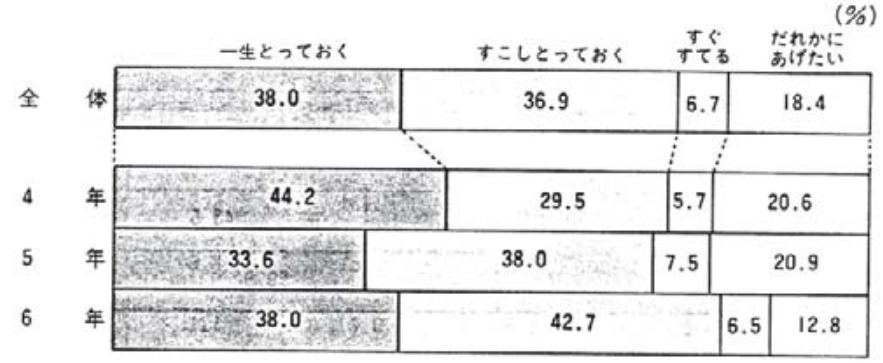


図34　古い下じきをどうするか

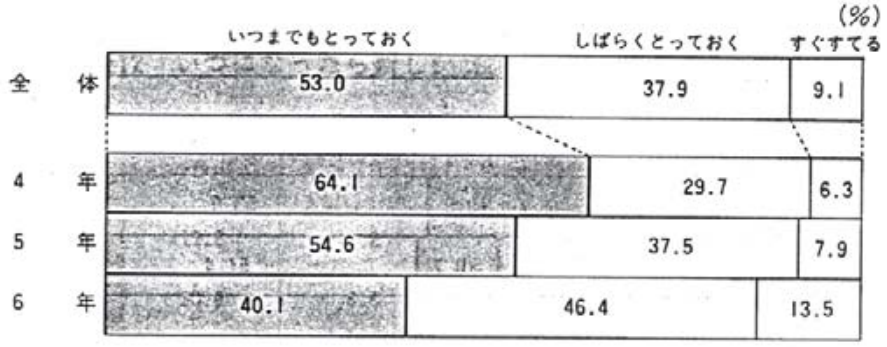
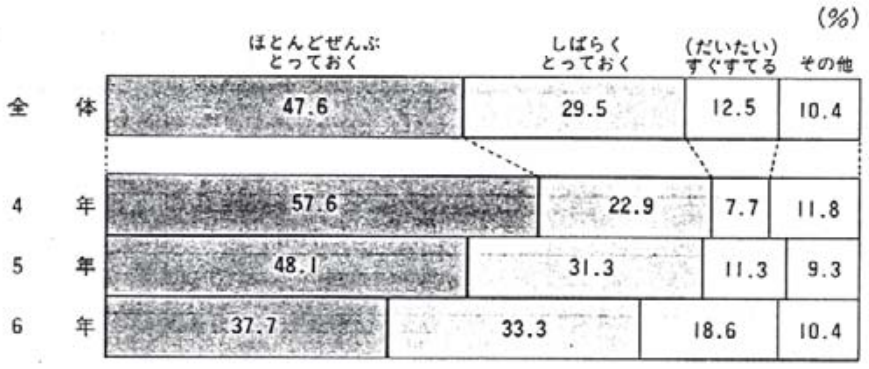


図35　古い(小さい)えんぴつはどうするか



もったいなさの感覚

モノへの感覚は、愛着ばかりでなく、経済観念（もったいなさの感覚）も含まれていると思われる。消費社会の中で、子どもたちはもったいなさの感覚を失ってしまっているかのように言われるが、その点はどうだろう。

図36～図39は、子どもたちに毎日使うごく安い学用品を、どのくらいまで使うか、たずねたものである。図が示すように、ノートは84%が最後のページまで使うと答え、鉛筆は鉛筆削りで削れる長さまで使う(約4センチ)、

図36　ノートはどのくらいまで使うか

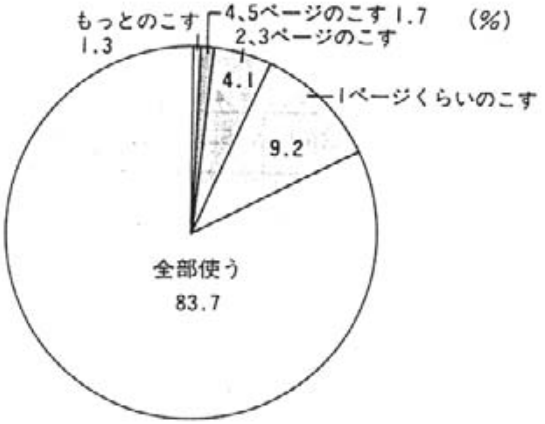
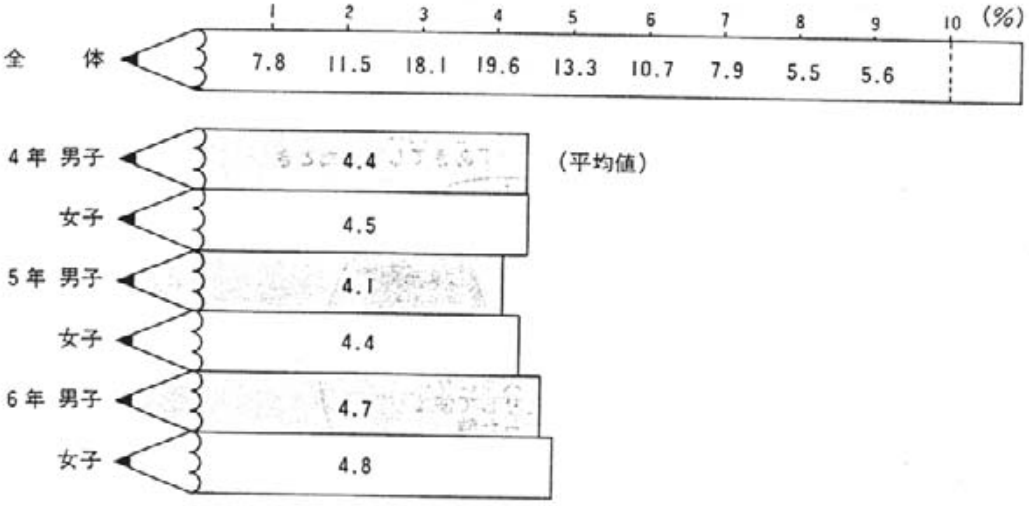


図37　どのくらいの長さになったら、新しいえんぴつととりかえるか



消しゴムも手で持って使いずらくなるまで使う（5センチ×1.5センチの消しゴムなら、3分の1になるまで）、下じきもひびが入って使えなくなるまで使う、と答えている。現実には、使いかけのものをたくさん持っているのだから、下じき所有率が1人平均4枚という数も出てくるのだが、少なくとも子どもたちの気持ちの中には、古いものでも「もう使えないもの」という意識はないのだろう。使えるが、つい新しいものを買ってしまって、捨てる気持ちにはならずに、そのままとっておく、それでモノがふえてゆく。そんな状態が考えられる。

図38　どのくらいの大きさになったら、けしゴムを使わなくなるか

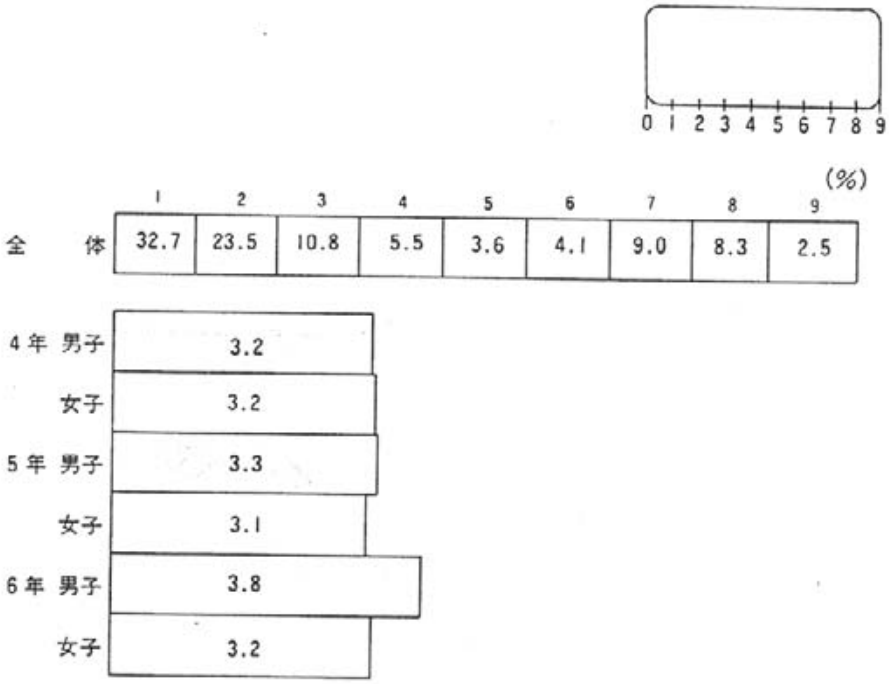
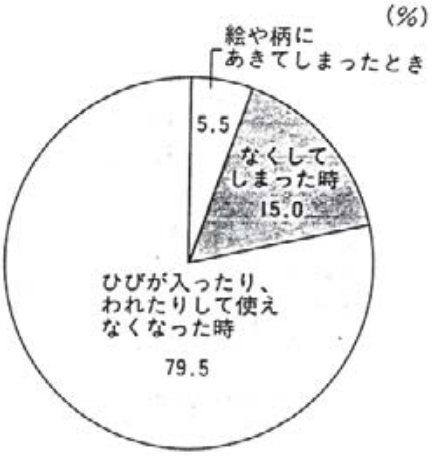


図39　どんなとき下じきをとりかえるか



まとめに代えて

*

子どもたちが、必要以上にたくさんの学用品（とくに文房具）を持っていることを見てきた。子どもがこづかいの範囲で買える低額の学用品は、本来の目的のほか、オモチャと同様に「自分の所有物（自分が処分しても親から叱られない財産）」の感覚を持てる数少ない対象のようである。また自分の好きな学用品を身近に置くことは、勉強に追われて遊びもままならない現代の子どもたちにとって、息抜き的な楽しみであろう。そうした意味で学用品は、オモチャと同様、子どもの大切な「友だち」となってきているようすを見てきた。

しかし、とは言っても、学用品は学用品であって、オモチャではない。表1で見てきたように、ふで箱を例にとると6個以上持っている子が4割近くもおり、同じくシャープペンシルを6個以上持っている子も、4割近くいる。これでは明らかに学用品を買う楽しみ、使う楽しみの範囲を越えていると思われ、むだ使い、おこづかいの浪費、整理のしつけの不徹底などが指摘されてもしかたがないだろう。

まだ服装のオシャレ、という自己表現のしかたを知らない子どもたちにとって、学用品の品選びはそうした青年期的な自己主張（個性的でありたい、カッコよくありたい）の幼ない芽生えであるようにも思われ、それはそれで大切なことかもしれない。しかし子どもは商業ベースにのせられ易く、市場としてもうま味があるために、企業側もこれにターゲットをしぼって攻勢をかけてくる。そうした中で、いかに子どもたちのほほえましいホビーの範囲にこれをとどめるか。それは、こづかいの与え方やしつけ、またものを大切にする心や身辺の整理能力のしつけなどを見直すことによって、はじめて可能となってくるであろう。

※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。